

〈高校生の部 佳作〉

祖母は母。

仁愛女子高等学校

吉川 詩織

「詩織が高校卒業するまでは、死んでも死にきれんわ。」

私の祖母は今年で八十九歳を迎える。この言葉は私が幼い頃から祖母に言い続けられている。私は、この言葉が大嫌いだった。

両親は私が三歳の時に離婚した。父は不器用ながらも一人娘の私を温かく見守ってくれ、祖母も母親のように大事にしてくれる。祖母は九十歳近くになるが、今でも海や山に毎日出かける。自然は祖母の生きがいである。

私が中学校三年生の頃。夏休みが明けると進路について毎日のように親ともめた。当時の私は定時制の高校へ行きながら仕事をしたかった。毎日ぐうたらテレビを見ていてまとも働かない父。祖母の年金にばかり頼る父。毎月電気代の請求が来るたびに働かない父を、こんな生活もう嫌だと泣きながら責める祖母。そんな二人を、泣くのをただぐつとこらえて見ているだけの私。こんな場面を見るのはもう嫌だと思っても、何もできずただ悔しかった。だから、一年でも早く社会に出て少しでも祖母を楽にさせてあげたかった。でもそんなこと、父は耳にも入れてくれなかった。おばたちにも説得され、私は普通の高校に進学を決めたが、私立なので金銭的にさらに負担をかけることになった。祖母は中学時代よりも私に厳しく当たるようになった。

「お前も父親と一緒に何もしようとしな。」

「私はご飯を食べることさえ我慢して生活費をまかなっているのに。」

「誰のおかげでここまでやっていけていると思ってるのか。」

こんな言葉が、祖母と顔が合うたびに飛んできた。冒頭のあの言葉もそうだ。だから私を助けて少しでも生活を楽にさせてくれ、と。親せきたちもみなそうだそうだと口をそろえて言っていた。私のしていることなんて、なんにも見たことないのに。私には同情を誘う言葉にしか聞こえなかった。祖母の言葉たちは、ただのプレッシャーでしかなかった。考えれば考えるほど分からなくて、学校に行くのも嫌になり、高校一年生の二学期後半ごろからは、週一でしか学校に行かなくなってしまった。ある日、学校に行こうとしない私を見た祖母は、目が合うなり、

「詩織が学校行かんで心配で動悸がする。」

ポツリと言った。私はその言葉を素直に受け取って祖母を心配する気にはなれなかった。また人のせいだ。いら立ちを抑えきれず、

「全部お前のせいや。」

と吐き捨てた。私は、こんな父親になったのはまずお前の育て方が悪かったからや、と根っこの方から責めた。父親のこと、お金のこと、学校のこと。今まで溜めてきたことを一つ残さず言い放った。大泣きしながら。それを見た祖母も声に出して泣きだした。全て吐き出して涙も止み、少し冷静になった頃、「カンニンしてくれよ。」

祖母はまだ泣いていた。

「末っ子で誰からもチャホヤされたきた父親はもうどうにもならんや。あきらめてくれ。そう思っせてめて私は詩織が高校卒業するまでは生きていたい。そのためにお前が小さいときからずっと貯金をしていた。」

震える声在必死に抑えて話す祖母に、私を責めるような言葉は一つもなかった。私はあんなに責めたのに。大分冷静になっていった私は、はっと気が付いた。そして、ひどく後悔をした。祖母は私が小さいときから私のことを一生懸命になって考えてくれていた。なぜ今まで祖母の言葉を素直に受け入れられなかったのだろう。

次の日から私は、重たい体を起こして、だんだん学校へ行くようになった。休んでしまいう日も、以前までは引きこもって寝ているだけだったが、積極的に家事をした。ご飯を作っって持つていくと、そこには毎回祖母の笑顔と、ありがとう、という優しい言葉があった。

祖母も、私をいちいち責めるようなことは言わなくなった。

後悔をして初めて気付くことはたくさんあると思う。今まで十七年間私を育ててくれている祖母の気持ちを私は素直に受け止めていきたい。高校卒業するまで、と祖母は言うけれど、私は、私が結婚をするまで、いや、私に子どもが生まれて、私が立派な母になれるまで生きていてほしい。一人の女性が立派な母になるには、自身の母親を見習うことがとても大切なことだと思うから。

私の母は、祖母である。